討論者による問題提起

「社会調査の成果を社会に還元するために」への問題提起

加藤　旭人

はじめに

一橋大学と NPO サーベイから来ました、加藤といいます。討論者ということで、これまでの報告を受けて議論の口火を切るという役割を承っていますので、そういうかたちでお話しできたらと思います。そうは言いつつも、まず前置きとして、自分の調査経験について少し紹介をさせていただいて、そのうえで、僕は調査をするなかで「似田貝-中野論争」に出会ったという経緯がありますので、どうして僕が「似田貝-中野論争」が大事だと思うのか、そして、今日の報告者の皆さんにどのようなことを聞きたいか、大枠としてはこういった流れで話していきたいと思います。

社会調査に関わるこれまでの経験①: 障害者をめぐる地域活動調査

まず自己紹介ですけれど、これまで調査に関わってきた経験を３つ挙げていきます。ひとつは、自分の修士論文のテーマでもありますし、これが自分の本流のテーマなんですけれども、第１に、障害者をめぐる地域活動の調査をやっています。大きな背景として、障害福祉をめぐる現状、あるいは地域社会をめぐる現状をみると、そこではすごく大きな構造変動が起きていて、行政-市場-市民社会の再編成が進んできていると僕は認識しています。もっと具体的には、支援のサービス化。たとえば、そもそもヘルパーという職業ができたということとか、あるいは、支援制度というかたちで介護保険ができて社会保障から保険になりつつあるということとかです。あるいは、地域住民や事業所の動員。たとえば、市役所で福祉に関わる自立支援協議会とかいろいろな協議会がありますけど、そういうところで行政と住民と事業所がいろいろと話しながら福祉のことを決めていくこととかです。それぞれは当然、必ずしも悪いことでばかりではないですし、当事者の参加とか、障害者条例とか、サービスの拡大とか、もちろんいい面もいっぱいあります。けれども他方で、福祉がサービス化することで当事者に負担が求められたりとか、小さい事業所が潰れたりとかもあります。小さい事業所だからこそのよさもあるんですね。それから、介助者の給料が上がらなかったりとか、無償のボランティアとして働かされたりとか、もっといえば地域ボランティアの動員を前提としたサービス支給量の抑制とかですね。現場の人は、まさにこのような課題に直面していますが、とにかくいろんなことが起きています。

こういったことが大きくは背景としてありますが、僕自身が対象としているのは、そのなかでもひとつの任意団体で、その任意団体へのフィールドワークをしています。レジュメには、「構造変動に巻き込まれながらも、多様な人が出会い関わる場を作る活動をしている任意団体へのフィールドワーク」と書いてあるんですが、具体的には、重度知的障害の方を中心として、支援者の方、ヘルパーの方、あるいは家族とかボランティアの方が集まる場を作るという活動をしている任意団体がありまして、そこに僕も関わっています。

「いろいろな人が集まって場を共にすることで、いかにして創発的な共同性を立ち上げることができるのか」ということをレジュメには書いていますが、この団体の活動の大きなテーマとしては、そういうことになります。あるいは、障害者−健常者という関係ですね。やはり、障害ということがありますので、どうしても差別が大きな課題としてあるわけですが、障害者や支援者や家族やボランティアが、それぞれ立場は違うけれども、活動を共にすることで、障害者と健常者とか、差別とか、支援する側とされる側とか、そういった関係性からいかにして自由になれるのだろうかということです。僕が関わっているのは、このような実践を通して地域社会を自分たちで作っていこうという活動で、要は、大きくは障害福祉や地域で変動が起きていて、また障害ということもあってなかなか活動できる場がないなかで、自分たちで活動の場を作っていくということ。このことを通して、障害福祉や地域社会の変動にまきこまれながら、そういった大きな力に比べればささやかかもしれないけれども、なんとか、よりよい社会を作る活動を、地域社会という足場を大事にしながらからやっていこうという活動です。だから、似田貝さんがまさに調査をした住民運動と似たような側面があって、そこもひとつ僕の興味ではあるんですけれども、このような活動を展開しています。

僕自身は、こうした活動に共感していて、調査者としてそこに関わっています。ただ、いわゆる純粋な調査者というわけではなくて、調査者でありながら、同時にヘルパー、支援者として、あるいはボランティアとしても活動に関わりながら、調査もやっているということです。というよりも、もっと正確に言うと、はじめは重度知的障害者のヘルパーをアルバイトとしてしながら障害福祉に携わっていって、ヘルパーの経験がだんだん増えるにつれて、この団体がやっているような活動と出会っていって、そのなかでやっぱりいろいろ考えたいなと思って、調査者として研究をするようになっていったという経緯があります。この点で、今回の原田さんのご報告のなかでも、支援と研究ってどういう関係にあるのかとか、調査者がどこまで引き受けるのかといったお話は、すごく自分事として聞いていました。

社会調査に関わるこれまでの経験②: 東日本大震災被災集落の地域調査

以上が自分にとっての一番大きな調査経験ですが、もうひとつ、東日本大震災後の被災集落の地域調査にも関わっているということで、今日はむしろこちらの方がメインというか、こちらの経緯で呼ばれたのかなと思っています。この調査自体についてですが、「社会と基盤」研究会（https://sgis.soc.hit-u.ac.jp/index.ja.html）の岩手調査班というものが調査主体となっていて、そこで共同調査をしています。解題報告の植田さんもこの岩手調査班の一員ということで、今日はその経緯もあって呼ばれたんですけれど、この調査について話をすると、まずこれは、岩手県の津波被災集落での地域調査ということになります。

この集落をめぐっては、やはり大きな構造変動の力が働いているわけです。この集落はもともと漁村で、ワカメ養殖で栄えたところなんですが、年齢構成も集落の構造もだんだんと変わってきていたなかで、東日本大震災があったわけです。被害が大きなところでは、ほぼすべての家が流されて、そこから生活再建をしていくプロセスでは、ここにも 12 メートルの非常に高い防潮堤がまさにできつつあるんですけれども（写真１）、そうしたかたちで大きな力が働いている集落です。流された家があった土地がいわゆる危険区域に指定されて、そこから自力再建された方もいらっしゃいますし、親戚の家に頼るとか、生活再建のかたちはいろいろあります。ただ、やはり防災高台移転というかたちで、これまでとは違ったところに住み、暮らしを再建するとなると、震災の問題と同時に、非常に大きな構造変動の力が存在しているのを、まざまざと感じるところです。

写真1　被災集落防潮堤建設の様子
撮影:加藤旭人(2017 年 10 月 15 日).

ここには、こうした構造変動に巻き込まれながらも、自らの手で自分たちの生活を再建するプロセスがあります。この集落は、震災後に集落としては解散するという決断をしたわけですが、集落の解散というのも、まさにひとつの手段だと思うんです。あるいは、被害の大きさをなんとかいなしていくということだけではなくて、集落の風景が変わっていくことに対して、そこに暮らしていた人は、その時々にいろいろな気持ちを抱いたりしながら、その場面その場面で生活を再建していかなければいけないわけです。では、そのとき「支援」というものには、どのようなあり方があるのか。たとえば、防災高台移転の際には図面を引いたりといったことも出てくるので、「支援」というときには、やはり専門家の役割も同時に問われてきます。大きなテーマとしては、こういうことになります。

そのなかで、僕が関わっている調査のかたちとしては、この被災集落の記録づくりを手伝いながら、研究としても調査をおこなう、ということになります。具体的には、岩手県沿岸部の津波被災地を調査[1]するなかで、岩手調査班の代表の山本唯人さんがこの集落と出会い、ちょうど震災後何年か経ったところで現地の方が少し動けるようになってきたということもあって、現地の方が解散したその集落があったことを記録に残したいということで、現地の方から山本さんが依頼を受けて、その記録を手伝うことを決めて、記録を手伝うだけではなくて、同時に、研究者としても調査をおこなわせてくださいという話になりました。まさに「共同行為」でと言われたなかで、どのようにアウトプットしていくのかということで、この記録冊子と調査報告書の２つを、今、作ろうとしています。ここでは、ある意味で支援と研究というのが分かれているわけですが、ともかくも、そういうかたちで調査を現在継続しているところです。

どの社会調査もそうだと思いますが、特にこの調査では、本当にいろいろな力学というか、いわゆる調査する人とされる人というようなわかりやすい関係ではない、一筋縄ではいかない関係があることを、調査をしていてまざまざと感じるというか、感じざるをえないんですね。具体的には、解散した集落の記録を残したいという現地の方の要請があって、それから、研究者の方にも、やっぱり記録を残すと同時に研究をしたいという関心というか欲望があります。さらには、被災地ということで、調査といってもなかなかデリケートなところもあるし、ある

[1] 山本唯人編，2014,『東日本大震災における支援活動と地域社会――岩手県大船渡市を中心に（「社会と基盤」研究会・岩手調査班報告書）』(2011～2014 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 B「グローバル化以降における資本制再編と都市――〈ヒト・モノ〉関係再編と統治性の研究」（研究代表者：町村敬志）研究成果報告書)，一橋大学大学院社会学研究科.

いは、解散した集落なので、もともと住んでいた方が散り散りになっていることもあって、現地の方に協力していただきながら、いろいろな方の人づてに出会っていかなくてはいけないわけで、具体的にどの人に会ってどのような話を聞くかということについても、現地の方のアレンジメントの力を非常に借りています。そして、もちろん、現地の方が散り散りになった背景には、自然災害はもちろんのこと、高台移転とかも含めた現地を超えた力学が働いているわけです。そうしたところに、大学で社会学をやっている人が「専門性」の看板を背負って入っていくわけです。そして、記録作り、特に話を聞くということで「専門性」を発揮しようとしつつも、他方で、建築関係や社会福祉の人の専門性とも違うし、似田貝さんもまさにそうだったのでしょうが、端的にその「専門性」はなにかと問われることもあります。僕らは、そうしたさまざまな磁場にいわば引き裂かれながら、調査を続けているということになります。では、そうやって行われた調査は、もちろん、こういうかたちでしかおこなえないからこそ、こうなっているのですが、それ自体がどういう営みであるかということを、やっぱり考えてしまうわけです。

もちろん、こういったことはどんな調査でもあることだと思いますが、どう考えたらいいのかについては、僕の勉強不足ももちろんですが、なかなかすぐにヒントは見つかりませんでした。ただ、こういったこと考える手がかりを得たいということもあって「似田貝-中野論争」を読んでみて、すると、もちろん現代と状況は違うけれども、ヒントをくれるなと思ったという経緯があります。

社会調査に関わるこれまでの経験③: NPO サーベイ

３つ目は、NPO サーベイのことです。僕自身は、NPO サーベイという団体に関わっています。これは、NPO というのがまずひとつポイントになっていて、社会調査というのは研究者のみでやるものではないということで、大学以外で社会調査について考えたり交流する場を設けたいということでやっています。やはり、社会調査をする人は研究者のみではないし、また、いろいろな調査をする人、調査をされる人、調査を読むといいますか調査でなにかを知りたい人、あるいは調査を学ぶ人、さまざまな人が社会調査を介してつながることのできる場を作りたいということで NPO サーベイは活動していて、僕もそこに合流しているという感じです。

具体的にはイベントや読書会を企画していて、たとえば、調査過程論、ビジュアル調査法、社会調査の標準化の問題なんかをテーマとして扱っています。今日の企画もそうですが、どうしても教科書とかでは知ることができないけれども調査において大事なことがあります。ただ、そういったことを語る場は、意外に少ないようにも思います。また、たとえば、社会調査の標準化の問題についても、社会調査に関する資格取得を推進する大学より、むしろ大学外でのほうが議論をしやすいと思います。そんな、大事なんだけれども扱えていないことを扱える場を作りたいという思いで、活動に関わっています。

3つの調査経験を貫く問題意識

以上の３つの調査経験のなかでの僕自身の問題意識としては、大きな構造変動にさらされながらも、どのようにして自らの手で社会を形成していくことができるのかということで、それは障害に関わる地域活動でも、あるいは被災集落の研究でも、基本的には同じなのかなと思っています。

もうひとつは、以上の課題に対して、やはり社会調査という方法を用いて接近したいということです。社会調査のなかでも、これはとりわけ質的方法に関わってくるんですけど、社会調

査論というのは、どうしても個人的な技術として語られがちで、なにか調査者の勘みたいな話になってしまったりするし、逆にそうではない方にいくと、社会調査のマニュアルというか標準化された社会調査の技法として語られてしまうんだけど、このどちらでもないところで社会調査論を論じたいというのが僕自身の大きな課題としてあります。

こうした問題意識にたつと、やはり「似田貝-中野論争」は、そのどちらとも違った観点から社会調査を捉え直す際に参照できるひとつのヒントになると思うんですね。

なぜ今「似田貝-中野論争」なのか

なぜ今、「似田貝-中野論争」なのかということです。やはり、さきほどまで述べた自身の調査経験から来ているんですけれど、もう少し大きな枠組みで言うと、やはり時代状況が、今とその当時とで似ていると思っています。似田貝さんが調査した当時は、高度経済成長期あるいは国家独占資本主義とその限界に突き当たっていて、今は新自由主義とその限界。このように表現していいと思うんですけど、個別の状況は違うけれども、とにかく大きな構造変化が起きているただなかで僕自身は調査対象に出会ったわけで、そこは似田貝香門さんも同じだったと思うんですよね。もちろん、すべての社会調査がそうなのかもしれないですが、そこはやはり、非常に似ていると思います。

もう少し話を絞って、社会調査をめぐる時代背景というところでいうと、社会調査の制度化みたいなものが起こってきたのだろうと考えています。たとえば、似田貝さんの問題提起にも社会調査法の議論が入っていて、とりわけ実証研究としての社会学をどう考えるのかという議論があったと思います。基調報告で紹介された安田三郎さんの「似田貝-中野」論争のまとめ方などは、まさに安田さん自身が拠って立つアメリカ社会学的なまとめ方になっているので、認識論の部分が落ちてしまうということだと思うんですね。このような論争は、現在でもかたちを変えながら存在していると思います。あるいは、社会における大学の位置づけの問題で、進学率の変化とか学生闘争もありましたが、やはり当時は、大学のあり方が鋭く問われていたと同時に、でも、まだなにか信頼されていたというか、問うてくれる対象だったということはあったのかなと思います。科学への批判というのも、とりわけ公害問題を語るうえでは重要だったと思います。こういったことは、実は今も同じで、調査方法論の議論というのは、今はむしろ質的調査をめぐる議論として起きていますが、テーマ自体は違うけれども、やはり社会調査がある種制度化してきたなかでの議論だろうと思います。

ただし、今では大学の位置づけが変化していて、反知性主義といいますか、信用されないことのほうが多いし、まともにとりあってくれないというか、「共同行為」を渇望さえされないみたいな状況で、いわゆる人文社会学系の危機です。それから、社会調査の制度化というところでは、とりわけ社会調査士の問題は、非常にあるかなと思います。こういったことを考えるたびに、もう少し前はどうだったのかなということで、そのなかで僕は「似田貝-中野論争」に出会ったのかなと思います。社会調査って、どうしても標準化から漏れる部分もあるし、でも、個人の勘所だけで議論しても、それでは個々人でばらばらになってしまうだけなので、それを回避するためには、社会調査史という歴史の視点から、もう少し自分の調査を位置づけながら、「似田貝-中野論争」を読み直していくことが必要なんじゃないかということで、僕自身は今この「論争」にとり組んでいます。

あと、これも以上の点と重なるんですけど、基本的に、「似田貝-中野論争」での調査者-被調査者関係というのは、これまでの質的調査の方法論論争においては、調査倫理の文脈で注目されてきたのかなと思います。そして多くの場合は、似田貝さんの主張は認めつつも、「似田貝さ

んの言うことはわかるけれども、中野さんの批判は正しいよね」といったかたちで評価される傾向にあったと思います。もちろん、これには多分いろいろな文脈があって、たとえば「似田貝-中野論争」に言及する桜井厚さんなどは中野卓さんの弟子だし、「中野-桜井論争」も実はあるわけですが、どうしても中野側からの評価になってしまうのかなとも思います。ただ、やはり、これまでの読まれ方はすごく不十分で、調査倫理とか質的調査はもちろん大事にしながらも、そこからより広くといいますか、もう少し豊かな内容を「似田貝-中野論争」から引き出すことができないかと考えています。とりわけ、似田貝さんがこの時代に出会った「なにか」とか、中野さんに対する「反論」の仕方とか、そういったものについても、似田貝さんの調査経験をふまえたうえで、もう少し似田貝内在的なかたちで掘り下げたいと、僕個人としては思います。ただ、似田貝さん自身はあまり調査経験を語っていない印象がありますので、もう少し語ってほしいとも思います。

問題提起

前置きが長くなってしまったんですが、問題提起というかたちで話をさせていただきたいと思います。

いろいろとあるんですが、やっぱり一番聞いてみたいのは、お三方のそれぞれの調査経験自体についてで、もう少し深く聞きたいなと思っています。それぞれへのコメントも含めて述べさせていただきますが、たとえば、三浦さんのご報告ですごく面白かったのは、反対の立場を表明すると調査者が変わっていくというところ。中立だと深く聞けないからということはあったと思うんですけど、そこにはもっといろいろな選択があったはずだと思うんですね。やっぱり、中立の立場を捨てるということは、なにかを調査できなくなるということかもしれないし、あるいは、そこで覚悟も必要だったと思うし、「行政と手を切る」という言い方になるのかはわからないですけれど、そこである種の可能性を選ぶと同時に捨てたんだとも思うので、そこでなにがあったのかというのを、もう少し伺いたいと思います。似田貝さんも調査者が変わるということについて述べていたと思うので、そこは「共同行為」にも関係する部分なのかなと僕自身は思っていて、もう少し伺いたいなと思います。

それから、林さんについても同様で、林さんの研究主題というのは、構造変動に抗いながらというか、構造変動を受けつつも、いなしつつ抗いながら、というところを述べていると思うんです。林さんご自身が、まさにその最たる方だなと思っていて、それにしても、なぜ名古屋だったのか。林さんの説明だと、「たまたまだった」という言い方なんですけど、やはりなにか戦略があったと思うんですね。やっぱり、学生をフィールドに連れてくるというのは、結構怖いことなんじゃないのかなと思ったりします。あと、行政と関わることでできるようになることと、できなくなることがあると思っていて、やはり行政と関わったからこそ、ここまで深く、幅広い立場の方に聴きとりができたと思うし、でも同時に、できなくなったことも多分あるはずで、そのあたりで、なにをどう選択したのかというあたりを伺いたいと思います。それがおそらく、社会政策形成と調査者の役割という部分につながってくると思うので、結論自体はすごく納得するんですが、そこにたどり着くまでの試行錯誤をもう少し伺いたいなと思います。

それから原田さんについては、ご報告の最後のほうで支援と研究の関係のお話があったかと思いますが、それぞれの段階で判断してきたことを語られていたと思いますので、そこをもう少し聞きたいと思います。休憩中にも少し議論になりましたが、やっぱり、どこまで研究者が引き受けるべきなのかという問題は、すごく大きいと思います。それから、支援と調査がだんだんと近づいてきたというお話だったと思うんですけど、僕自身の経験は、ヘルパーとして関

わりつつ研究しているというもので、対象も方法も全然違うけれども、支援と調査がむしろ緊張する場面とかも、おそらくあったりすると思うんですね。ここは支援を優先するのか調査を優先するのかとか。あるいは、調査を続けていると、どうしても本当に支援一本でやっている人にやっぱり勝てないなと僕は思うんですね。勝つとか負けるっていう言い方はちょっと違うけれど、そこには支援者になりきることができない自分もいると思うんですね。やっぱり、フィールドだったり実際の支援について一番詳しいのはフィールドの人で、その意味で、僕はフィールドの人には、もうなんというか、かなわないというか。ただ他方で、支援をしたいのかと言われると、そういう部分ももちろんあるのだけれど、それもまた違うというか。なんというか、僕自身はそうなので、そのあたりの話は結構重要なのかなと思っています。あるいは、NPO を立ち上げるということについても、その場の必然性もあったのかもしれないですが、ある意味では、大学では調査できないという側面もあったかもしれなくて、だから大学の外に出るっていうのがひとつの戦略だったという部分もあったかもしれないと思うんです。あえて大学ではやらずに NPO でやることはなにかとか、そのへんの話をもう少し聞きたいなと思います。

なぜこのような話を聞くかというと、最初の植田さんの問題提起に戻ると思うんですけど、社会調査に関することはいろいろと議論されていますが、それを乗り越える暗黙知やヒントみたいなものが、それぞれの調査者の経験のなかにあるのではないかと僕も思っていて、調査者−被調査者関係の問題についても、既になんらかのかたちでクリアといいますか、鍵括弧つきでの「クリア」をしてきたと思うんですね。なので、そのへんの話を伺うことが、まずは大事なのかなというか、僕は知りたいなと思います。ちょっと大きな質問になりますが、こういったことを聞いてみたいという感じです。どうでしょうか。